

英語におけるストレス (stress), アクセント (accent), イントネーション (intonation) (2)

深澤俊昭

韻律 (Prosody) の研究においては、語のレベルでの韻律と発話 (文) のレベルでの韻律とを分ける必要がある。語が一語で発話された場合は既にそれが (一語文) 発話であり、発話である限りは、そこには常に必ずイントネーションが存在する。イントネーションは、声の高低 (ピッチ, Pitch) が発話の意味を変える発話 (文) のレベルでの韻律であって、語のレベルでの韻律分析からは分離されなければならない。これまでの研究ではこの分離がなされてこなかったが、これは分析の厳密さと、分析の抽象度に関わる問題であることを従来の研究を批判的に検討することによって明らかにした。

キーワード：語のレベル、発話 (文) のレベル、強勢・アクセント、リズム、イントネーション

5. 語のレベルにおける韻律

研究者によって異なる語強勢 (Word Stress) と語アクセント (Word Accent) の扱いの問題

import と **import, politics** と **political** 等の英語の単語に現れる韻律的特徴 (Prosody) は語強勢 (Word Stress) であるのか、あるいは語アクセント (Word Accent) であるのか。研究者によって異なるこの専門用語の使用は、研究者がこの韻律的特徴を音声学的に又音韻論的にどのように考えるかによって異なるが、分析の抽象度に関してはほぼ共通しているといえる。即ち、抽象度の高い音韻論的アプローチというよりは抽象度の低い音声学的アプローチにその特徴と共通性があるという点である。

表 1 はこの問題に関する主要な研究者の分析をまとめたものである。こ

ここでは、語レベルと発話（文）のレベルにおける英語の韻律に関する全体の全体像が把握できるように、次の 6. 発話（文）のレベルにおける韻律の箇所でも扱う韻律についても合体して載せておく。

表 1

	語のレベル 語強勢 (Word Stress) / 語アクセント (Word Accent)		発話 (文) のレベル リズム イントネーション			
	強勢/アクセント (Stress / Accent) 語強勢 (Word Stress) / 語アクセント (Word Accent)		リズム (Rhythm) 文強勢 (Sentence Stress) / 文アクセント (Sentence Accent)		イントネーション (Intonation) トナリティ (Tonality) トニシティ (Tonicity) トーンズ (Tones)	
	使用術語 (Terms)	音声特徴 (Manifestation)	使用術語 (Terms)	音声特徴 (Manifestation)	使用術語 (Terms)	音声特徴 (Manifestation)
Jones (1975)	WORD STRESS	Stress	SENTENCE STRESS	stress	INTONATION (Tune)	pitch (+stress)
Gimson (1975)	ACCENT	PROMINENCE Stress Pitch Quality Quantity	ACCENT primary secondary unaccented	pitch length stress quality	ACCENT primary secondary Nucleus	pitch (+stress)
Kreidler (1989)	STRESS	DEGREES OF STRESS +Stress -Stress +Accent -Accent +Strong -Strong	STRESS	stress	ACCENT	pitch (+stress)
Roach (2000)	STRESS	PROMINENCE Loudness Length Pitch Quality	STRESS	stress	TONIC STRESS (Tone)	pitch (+stress)

これらの研究者以外でも、ストレス (Stress) とアクセント (Accent) という術語の使用に関しては、語 (Word) のレベルではストレス (Stress), 発話 (文) のレベルではアクセント (Accent) の使用が多いという傾向が見られる。

また、アクセント (Accent) という術語が、(1) 厳密な意味においてではなくストレス (Stress) を意味して使われることがあるという指摘、及び、(2) ストレス (Stress) の音声特徴、特にピッチによる卓立現象 (Pitch Prominence) にアクセント (Accent) という術語使う研究者も多いが、そのような語の使用は未だ確立されていないという指摘がある。

- (1) The term ACCENT is sometimes used loosely to mean stress, referring either to prominence in a general way or more specifically to emphasis placed on certain syllables. (What we have mentioned above as WORD-STRESS, or LEXICAL STRESS is sometimes called WORD ACCENT). [Clark, J. and Yallop, C. (1990; p. 288)]
- (2) It has been suggested by many writers that the term 'accent' should be used to refer to some of the manifestations of stress (particularly pitch prominence), but the word, though widely used, has never acquired a distinct meaning of its own. [*Cambridge English Pronouncing Dictionary* (2003; p. 511)]

語アクセント論の Gimson (1975) も、語強勢論の Roach (2000) も、共に語の韻律的特徴を Prominence (卓立) 現象として捉え、その卓立をもたらす音声的特徴を、Gimson (1975) は Stress, Pitch, Quality, Quantity とし、Roach (2000) は Loudness, Length, Pitch, Quality としている点で基本的には共通の立場に立っていると言える。Jones (1975) は、Word Stress を Prominence (卓立) とは別個の概念であるとして語の韻律的特徴を Stress としている点で Gimson (1975), Roach (2000) とは異なる。Kreidler (1989) は、語強勢論に立っているが、その内容は Prominence (卓立) ではなく Degrees of Stress (強勢の程度) として、+accent, -accent, +stress, -stress, +strong, -strong の組み合わせによる 4 段階の強勢という概念で語の強勢

を記述する。また、Kreidler (1989) の場合は、この 4 段階強勢を語強勢に限定せずに、発話 (文) のレベルにおいても使用する点で、4 段階アクセント、即ち、primary accent (◌¹), secondary accent (◌²), secondary accent (◌³), unaccented (◌⁰) を採用する Gimson (1975) と共通するものがあると言える。

英語の発音辞典、英語の辞書 (英英、英和) に見られる強勢 (Stress) という術語と、アクセント (Accent) という術語の使用問題

強勢 (Stress) という術語と、アクセント (Accent) という術語の使用に関しては、世界的に著名な英語発音辞典、Wells, J. C. (2000) の *Longman Pronunciation Dictionary*, 及び、Jones, D. (2003) の *Cambridge English Pronouncing Dictionary* の 2 冊は共に強勢 (Stress) を使用し、更に、一般の英語辞典 (英英辞典), *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (2000), *Longman Contemporary English* (1995), *Cambridge International Dictionary of English* (1995), *Collins Cobuild English Dictionary* (1995) もまた、全てアクセント (Accent) は使用せず強勢 (Stress) という術語を使用している。

Cambridge English Pronouncing Dictionary (2003) は、Stress を 'A property of syllables which makes them stand out as more noticeable than others.' (p. 511) と述べ、その具体的姿を次のように記している。

It is necessary to consider what factors make a syllable count as stressed. It seems likely that stressed syllables are produced with greater effort than unstressed, and that this effort is manifested in the air pressure generated in the lungs for producing the syllable and also in the articulatory movements in the vocal tract (p. 511).

そして、この肺から押し出される空気と調音器官の活動 (effort) によってもたらされる強勢 (stress) が、聴覚的影響として、ピッチによる際立ち (pitch prominence), 長さによる際立ち (longer), 声の大きさによる際立ち (louder) をもたらすと述べている。

These effects of stress produce in turn various audible results: one is 'pitch prominence', in which the stressed syllable stands out from its

context (for example, being higher if its unstressed neighbours are low in PITCH, or lower if those neighbours are high; often a pitch glide such as a fall or rise is used to give greater pitch prominence). Another effect of stress is that stressed syllables tend to be longer—this is very noticeable in English, less so in some other languages. Also, stressed syllables tend to be louder than unstressed, though experiments have shown that differences in loudness alone are not very noticeable to most listeners. (p. 511)

この発音辞典は、Daniel Jones の *English pronouncing Dictionary* (1917) に改定を加えてきたものであって、この 2003 年度版ではその編者に Peter Roach が入っていることから、当然に先に見た Roach (2000) の強勢・プロミネンス (Stress-Prominence) 論に則ったものであり、本来イントネーションの韻律的特徴として扱うべきピッチ (pitch) 現象を単語の韻律現象に組み入れている点で問題点を残しているといえよう。

J. C. Wells の *Longman Pronunciation Dictionary* (2000) は、Stress の解説において、強勢のある音節 (a stressed syllable) を、Gimson (1975) の述べた、リズムを担うビート (rhythmic beat) の観点から説明している。‘A stressed syllable is one that carries a rhythmic beat. It is marked by greater loudness than unstressed syllables, and often by pitch-prominence, or greater duration, or more clearly defined vowel qualities.’ (p. 741) しかしながら、Gimson (1975) が語アクセント (Word Accent) の中心的音声特徴の一つとしたピッチ・プロミネンス (pitch-prominence) を、‘An accent is the placement of intonational pitch-prominence (= higher or lower pitch than the surroundings) on a word. Speakers choose to accent certain words (or to de-accent others) because of the particular meaning they wish to convey in a particular situation. Accents can be located only on stressed syllables.’ (p. 741) と述べて、新しく intonational pitch-prominence なる概念を導入している。そして、その intonational pitch-prominence を示す具体例として、collapse と tumble の 2 語を使い、‘Thus to accent the word **collapse** kə 'læps the pitch-prominence goes on the syllable **læps**, but in **tumble** 'tʌm bəl on the syllable **tʌm**.’ (p. 741) と表示すると述べている。

この *Longman Pronunciation Dictionary* (2000) における強勢 (Stress) とアクセント (Accent) の理論は, Gimson (1975) と Roach (2000) と Kreidler (1989) の理論を合わせた混交的な様相を呈するものとなっている。これは, ピッチ (pitch) 現象を語の韻律的特徴と見なす立場から, 発話 (文) のレベルでの韻律的特徴と見なそうとする考え方へ移行する兆しを包含した過渡的段階にある韻律理論といえよう。それ故一般的には分かりにくい説明 (confusing) となっていることは否めない。

強勢 (Stress) という術語と, アクセント (Accent) という術語の使用に関しては, 日本における英和辞典では, 英語圏での扱いとは極めて対照的に, 『大修館 ジーニアス英和大辞典』(2002) と『大修館 ジーニアス英和辞典』(2002) が強勢 (Stress) を使用している以外は, 『研究社 新英和大辞典』(1980), 『小学館 ランダムハウス英和大辞典』(1993), 『研究社 リーダーズ英和辞典』(2002), 『研究社 新英和中辞典』(1996), 『小学館 プログレッシブ英和中辞典』(1998) は共に, 全てアクセント (Accent) を使用している。ただし, 『大修館 ジーニアス英和辞典』は初版の 1998 年版では強勢 (Stress) ではなくアクセント (Accent) を使用していた。

この日本における状況は, A. C. Gimson が日本の英語音声学界に大きな影響を与え続けてきたことと無縁ではないと思われる。A. C. Gimson は語アクセント (Word Accent) 論提唱の中心的人物として, 英語音声学の理論書 *An Introduction to the Pronunciation of English* (1962 年初版) 及び, 著者自身の吹込みによる録音テープ付き英語音声学の実践書 *A Practical Course of English Pronunciation* (1975) を通じて, 日本の英語学界, 英語音声の研究者, 英語教師に強い影響を及ぼしてきていたからである。その影響力は Alan Cruttenden による *An Introduction to the Pronunciation of English* の改定版 *Gimson's Pronunciation of English* (2001) によって今日に至るまで続いているといえよう。

語レベルの韻律的特徴と発話 (文) レベルの韻律的特徴を区別し切り離すことの必要性

Gimson (1975) の語アクセント論と, Roach (2000) の語強勢論は, どちらも単語が発話された場合の卓立現象を語アクセントないしは語強勢としたのであるが, そこに見られる問題点は, どちらの立場であれ, 単語が発音された場合の音声を分析し, そこにおいて卓立 (Prominence) を形成するとみなされる全ての音声現象を単語の特徴, 即ち, 語強勢を作り出す

音声要素としてしまった点にある。即ち、発話に伴うイントネーションの現象をも単語の現象として扱ってしまったために、語のレベルでの韻律、即ち、強勢・アクセント (Stress/Accent) と、発話 (文) のレベルにおける韻律、即ち、イントネーション (Intonation) との分離がなされていないことにある。この点、Kreidler (1989) の語強勢を形成する音声特徴が Gimson (1975) と Roach (2000) のそれとは異なるものの、+Accent, -Accent という発話のレベルでの韻律的特徴であるイントネーションを語のレベルに持ち込んでいるという点においては三者に共通する問題点であるといえる。Jones (1975) は、単語の韻律的特徴を強勢 (Stress) として、その強勢を形成する音声特徴を強勢 (stress) のみとした点で他の三者と異なる。しかし、単語の韻律的特徴を音声的に定義している点で四者は共通している。これは、既に指摘した韻律分析の抽象度の問題である。

以上、既に指摘したように、単語が独立に発話された場合に見られる全ての音声現象を単語独自の音声現象として捉えている点に分析の問題点が存在する。即ち、単語が独立に発話された場合は、これは所謂一語文としての発話になるのであって、その発話に現れる音声現象がすべて単語のレベルでの音声現象ということにはならないからである。単語一語だけの発話であっても、発話である以上は必ず発話 (文) レベルでの韻律、即ちイントネーションが存在しているからである。問題は、一語だけの発話 (文) と二語以上の発話 (文) の分析を通じて明らかになる、単語レベルでの音声特徴と発話レベルでの音声特徴を区別することによって、単語の韻律と発話の韻律とを分離する必要があるのである。以下ではこの点を検討することとする。

6. 発話 (文) のレベルにおける韻律

文強勢 (Sentence Stress) と 文アクセント (Sentence Accent)

研究者によって語のレベルでの韻律的特徴を示す術語として強勢 (Stress) とアクセント (Accent) が使用されたように、発話 (文) のレベルにおいても、強勢 (Stress) を使う研究者とアクセント (Accent) を使う研究者とが存在している。David Crystal の *A Dictionary of Linguistics and Phonetics* (1991) にこの両用語の使用についての説明が見られる。

先ず、強勢 (Stress) が文 (Sentence) 及び語 (Word) のレベルで意味を異ならせる機能を有しているとして例をあげて説明している。

From the viewpoint of PHONOLOGY, the main function of stress is to provide a means of distinguishing degrees of emphasis or contrast in SENTENCES (**sentence stress**), as in *The **big** man looks angry*; the term **contrastive stress** is often used for this function. Many pairs of WORDS and word sequences can also be distinguished using stress variation (**lexical stress** or **word stress**), as in the contrast between *An increase in pay is needed* and *I'm going to increase his pay*—/ɪŋ'kri:z/ v. /ɪŋ'kri:z/—or the distinction between 'black 'bird and 'blackbird. (p. 328)

アクセント (Accent) に関しては、語アクセント (Word Accent) の例として *I'm going to record the tune* における動詞の record と *I've got a record* における名詞の record を挙げ、文アクセント (Sentence Accent) に関しては、これが別名、対比アクセント (Contrastive Accent) とも呼ばれるとして、*He was wearing a red hat* と *He was wearing a red hat* を例に挙げてその対比の内容を説明している。更に、Accent という術語と Stress という術語については、'The term STRESS, however, is often used for contrasts of this kind (as in the phrase 'word stress' and 'contrastive stress') (p. 2) と述べて研究者によって同じ現象に対して異なる術語が使われていることを明らかにしている (表 2)。

リズム—— (文) アクセント (Accent) 論と (文) 強勢 (Stress) 論

(1) Gimson (1975) のアクセント論

語アクセント論者の Gimson (1975) は、発話 (文) のレベルにおいてもアクセント論の立場に立っている。但し Gimson (1975) は「文アクセント」(Sentence Accent) なる術語は用いず、「語が連続する発話においてアクセントをつけること」(Accentuation in connected speech) あるいは、「語が連続する発話におけるアクセントの型」(Accental patterns of connected speech) なる表現を用いて英語のリズム及びイントネーションを記述する。

Connected speech, i.e. an utterance consisting of more than one word, exhibits features of accentuation that are in many ways comparable with those found in the polysyllabic word. Thus the character of a connected

表 2

	発話 (文) のレベル リズム イントネーション			
	リズム (Rhythm) 文強勢 (Sentence Stress) / 文アクセント (Sentence Accent)		イントネーション (Intonation) トナリティ (Tonality) トニシティ (Tonicity) トーンズ (Tones)	
	使用術語 (Terms)	音声特徴 (manifestation)	使用術語 (Terms)	音声特徴 (manifestation)
Jones (1975)	SENTENCE STRESS	stress	INTONATION (Tune)	pitch (+stress)
Gimson (1975)	ACCENT primary secondary unaccented	pitch length stress quality	ACCENT primary secondary unaccented Nucleus	pitch (+stress)
Kreidler (1989)	STRESS	stress	ACCENT	pitch (+stress)
Roach (2000)	STRESS	stress	TONIC STRESS (Tone)	pitch (+stress)

utterance may be said to be determined both by a changing pattern of successive qualities and quantities and also by the relationship of its parts, i.e. of the words composing the continuum. Some parts of the connected utterance will be made to stand out from their environment, in the same way that certain syllables of a polysyllabic word are more prominent than their neighbours; in both cases, accentuation has a contrastive function. (p. 257)

Gimson (1975, pp. 258-262) は上記の記述を下記の具体例を使って説明し, ● と ● とが英語のリズムを形成し, 大きな黒丸から次の大きな黒丸, そして次の大きな黒丸までは (例えば ● ● ♪,あるいは, ♪ ● ●, 等)

ほぼ同じ時間がかかる傾向にある (isochrony) とする。

We put the case in the hall は下記の型が可能であるが、

•	•	•	•	•	•	◌
◌	•	•	•	•	•	•
•	◌	•	•	•	•	•
•	•	•	◌	•	•	•
•	◌	•	◌	•	•	◌
•	•	•	•	◌	•	•

次の、case と hall にアクセントが無い型は存在しないと述べている。

•	•	•	•	•	◌	•
---	---	---	---	---	---	---

上記の例において Gimson (1975) は、彼の語アクセントにおけるアクセントの型の記述と同様に、◌を第一アクセント (primary accent), •を第二アクセント (secondary accent), •を無アクセント (unaccented) としている。ピッチ変化が生ずる第一アクセント◌の位置が移動する現象は、実はイントネーションの問題、即ち、トニシティ (tonicity) の問題であるのだが、あくまでも語アクセントの問題として扱っている点に特徴がある。既に見たように、•は強勢現象であり、◌は強勢現象にイントネーションの現象 (ピッチ変化) が加わったものなのであるが、Gimson (1975) はこの強勢現象とイントネーション現象の区別をしていない。これは、彼が、ピッチを語のレベルでアクセントを作り出す卓立 (Prominence) の音声要素の一つとして扱い、ピッチを発話 (文) レベルでのイントネーションの要素として語アクセントから切り離さなかったことによるものであるといえよう。

(2) Roach (2000) の強勢論

Roach (2000) は語のレベルにおいても発話 (文) のレベルにおいても、強勢 (Stress) なる術語を用いて、アクセント (Accent) なる術語は使わない。ただ、文強勢 (Sentence Stress) なる術語も使わず、Gimson (1975) 同様に、「語が連続する発話の諸相」(Aspects of connected speech) の一つとして英語のリズムを取り扱う。リズムの表記法は Gimson (1975) とは異なり、下記の方式を取る。'は、太字の大きなフォントと共に強勢 (Stress) を示し、これと細字の小さなフォントの箇所とが英語のリズムを作っている。

くとする。Roach (2000) と Gimson (1975) との違いは、使用する術語が強勢 (Stress) とアクセント (Accent) との違いにあることと、表記の仕方が異なることであるが、語のレベルでの韻律的特徴に関しては、これを卓立 (Prominence) 現象として捉えてその卓立を形成する 4 つの音声要素の 1 つとしてイントネーションの要素であるピッチ (Pitch) を含むことにおいて共通する。なお、下記の例文において Roach (2000, p. 236) はピリオド (.) をつけないが、これは例文が文法上の文ではなく、発話 (文) であることを示しているからである。

'How do the 'lights 'work

There are some 'new 'books I must 'read

She 'took her 'aunt for a 'drive

The 'basket was 'full of 'things to 'eat

'Why should a 'man 'earn 'more than a 'woman

なお、Roach (2000) は、Gimson (1975) が第一アクセントとした ♪ を、トニック・ストレス (Tonic Stress) として、これをイントネーションの要素として扱っている。これは Roach (2000) がピッチ変化を語強勢 (Word Stress) の一音声要素としたことと矛盾する扱いであるが、ピッチ変化を語強勢から切り離して発話 (文) におけるイントネーションの要素とする方向へ分析が移りつつあることを示唆するものといえよう。

参考文献

- Abercrombie, D. (1967). *Elements of General Phonetics*. Edinburgh University Press.
 Adams, C. (1979). *English Speech Rhythm and the Foreign Learner*. Mouton.
 Baker, A. (1982). *Introducing English Pronunciation*. Cambridge University Press.
 Bolinger, D. L. (1986). *Intonation and Its Parts*. Stanford University Press.
 Bolinger, D. L. (1989). *Intonation and Its Uses*. Stanford University Press
 Catford, J. C. (1977). *Fundamental Problems in Phonetics*. Edinburgh University Press.
 Catford, J. C. (2001). *A Practical Introduction to Phonetics*. 2nd edn. Oxford University Press.
 Clark, J. and Yallop, C. (1990). *An Introduction to Phonetics and Phonology*. Blackwell.
 Couper-Kuhlen, E. (1986). *An Introduction to English Prosody*. Edward Arnold.
 Crystal, D. (1969). *Prosodic Systems and Intonation in English*. Cambridge University Press.

- Crystal, D. (1991). *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. 3rd edn. Blackwell.
- Fudge, E. C. (1984). *English Word Stress*. Allen and Unwin.
- Gimson, A. C. (1972). *An Introduction to the Pronunciation of English*. 2nd edn. Edward Arnold.
- Gimson, A. C. (1975). *A Practical Course of English Pronunciation*. Edward Arnold.
- Halliday, M. A. K. (1967). *Intonation and Grammar in British English*. Mouton.
- Hawkins, P. (1984). *Introducing Phonology*. Hutchinson.
- Hyman, L. (1975). *Phonology: Theory and Analysis*. Holt, Rinehart and Winston.
- Jones, D. (1967). *The Phoneme; Its Nature and Use*. Cambridge: W. Heffer & Sons Ltd.
- Jones, D. (1975). *An Outline of English Phonetics*. 9th edn. Cambridge University Press.
- Kenworthy, J. (1987). *Teaching English Pronunciation*. Longman.
- Kingdon, R. (1972). *The Groundwork of English Stress*. Longman.
- Knowles, G. O. (1987). *Patterns of Spoken English*. Longman.
- Kreidler, C. W. (1989). *The Pronunciation of English*. Blackwell.
- Ladefoged, P. (2001). *A Course in Phonetics*. 4th edn. Harcourt College Publishers.
- MacCarthy, P. A. D. (1978). *The Teaching of Pronunciation*. Cambridge University Press.
- O'Connor, J. D. (1973). *Phonetics*. Penguin.
- O'Connor, J. D. (1971). *Better English Pronunciation*. Cambridge University Press.
- O'Connor, J. D. and Arnold, G. F. (1973). *Intonation of Colloquial English*. 2nd edn. Longman.
- Poldauf, I. (1984). *English Word Stress; A theory of Word-Stress Patterns in English*. Pergamon Press Ltd.
- Ramsaran, S. (ed.). (1990). *Studies in the Pronunciation of English*. Routledge.
- Roach, P. (2000). *English Phonetics and Phonology*. 3rd edn. Cambridge University Press.
- Schmerling, S. (1976). *Aspects of English Sentence Stress*. University of Texas Press.
- Wells, J. C. (2000). *Longman Pronunciation Dictionary*. 2nd edn. Longman.